

Title	ミトラス教図像の付属場面
Sub Title	A Study of Mithraic theogony
Author	小川, 英雄(Ogawa, Hideo)
Publisher	三田史学会
Publication year	1994
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.63, No.4 (1994. 8) ,p.85(431)- 100(446)
JaLC DOI	
Abstract	A number of verses which were found written on the wall of a Mithraic temple in the Santa Prisca Church in Rome concern the doctrine of the Mithraic religion. But since these verses were only fragmentary, a complete understanding of the doctrine could not be discerned. Thus, we gain further knowledge through an iconographical study of the so-called accessory scenes of the bull-slaying action of the god Mithras. Accordingly, the results of my analysis of these scenes point to the following conclusion: 1) they represent a theogonic story which has nothing to do with Iranian religious literature; 2) the legend of Mithras (from birth to his and Sol's ascension into heaven by chariot) was incorporated in that theogony; and 3) the place of origin of the the accessory scenes - as well as the Mithraic theogony - can be placed in Late Hellenistic Phoenicia.
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940800-0085">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19940800-0085</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# ミトラス教図像の付属場面

小川 英雄

## 序

ミトラス教の教義については、信者自身による著作など同時代の文献史料が存在せず、文学資料としては、ドウラ・エウロポスとローマ市サンタ・プリスカ教会地下のミトラス神殿から発見された幾つかの短い碑文<sup>(1)</sup>が挙げられるだけである。それにもかかわらず、一九世紀末のキュモンの著作<sup>(2)</sup>以来、ミトラス教の教義についてまとまった記述がされてきたのは、キュモンによって確立された図像解釈のおかげである。

ミトラス教の独立した図像としては、牛を殺す神、岩から生れる神、獅子頭神の三つ<sup>(3)</sup>が存在するが、そのうち後の二つは単独ではその教義上の意味を読み取ることは困難である。それに対し、牛を殺す神の図像はその神殿

内の位置から見て最も重要な教義上の意味を想定しうるし、その複雑な構成を分析すれば、そこから一定の教義体系を抽出することが可能なのである。とりわけ、牛を殺す神の像の縁辺部に位置する、複数の囲み枠は付属場面と呼ばれ、そこには神の牛殺しの行為を含むミトラス教の教義が絵解きされている。実際、そこには一種の神統記が展開されている。

しかし、キュモン以後のこの図像の研究史を見ると、後述のように彼自身の方法論的問題点もあり、著しい進歩があったとは考えられず、最近の学界においてもこの点についての研究はむしろ停滞しているとさえ云えうことが出来るであろう<sup>(4)</sup>。本稿においては、牛を殺す神にまつわる図像、とりわけいわゆる付属場面について、キュモン以後の研究史を振り返りつゝ、そこに見られるミト

ラス教教義の特質を述べることが目的とする。

### 一 凶像としての付属場面

ミトラス教の教義について残された資料は、ミトラス神殿内に遺された断片的碑文と凶像（壁画、浮彫、彫像）の二つである。その中でも牛を殺す神の像はミトラス教の代表的凶像であり、これはすべてのこの宗派の神殿において、最も神聖な奥室中央に安置され、或は描かれていた。従って、ミトラス教の教義の中心が、神の牛殺しにあつたことは明らかであり、それと同時に付属場面は常に信者たちの目に触れる結果となつた。彼等は神の牛殺しばかりでなく、付属場面が伝える教義を理解していた。

他方、牛殺しの意義を述べた文献は遺っていない。ようやく、一九五〇年代にサンタ・プリスカ教会地下の神殿から発見された断片的碑文<sup>(5)</sup>（汝は永遠の流血によつて我々をも救つた）が神の牛殺しの凶像と対応すると思われる唯一の章句を明らかにした。この碑文の「永遠の流血」(eternali sanguine fuso)は、牛殺しの凶において、ミトラスが短剣をさした牛の肩の傷口から出ている血を指すと思われるが、全体の神学的意味はこれだけで

は明らかではない。他方、ミトラス神の牛殺しの凶像は古代宗教美術、とりわけ多シンボル表現（ポリシンボリズム）に従つており、後述の通り、基本的には豊饒崇拜を表わしているが、上記碑文を同じように豊饒崇拜として解釈すべきかどうかは、必らずしも明らかでない。両者の対応関係はいまだ未解決である。

いずれにせよ、キュモンが一八九八年に付属場面を含む諸凶像についての解釈を発表した時<sup>(6)</sup>、そしてその後一九二三年に彼の『ミトラの密儀』の最終的な形<sup>(7)</sup>のものを刊行するまでの間、彼は牛を殺す神をめぐるミトラス教教義を、ミトラス教徒自身の文字による説明は全くなしに復元しなければならなかつた。もつとも、彼はアヴェスタ等のイランの宗教文学を利用したが、その点はまさに彼の凶像解釈の問題点であつたのであり、フェルマーレンやテウルカンのような最近のスタンダードなミトラス教概説が避けて通ろうとしてるところのものである。しかし、キュモンの記述をみると、ミトラス教教義のイラン的解釈は第一義的なものではなく、まず最初に凶像の読み取りがあつたと云つてよいであろう。

キュモンによる読み取りの対象となつた牛殺しの凶像には二つのポイントがある。第一は凶像中央を占める牡

牛とそれを組み敷いて殺そうとするミトラス神に直接かかわっている物や動物、すなわち、クラテール、さそり、犬、蛇、鳥と二柱の従者（カウテスとカウトパテス）である。これ等はすべて牛殺しの場面に居合わせ、何等かの形でそれに関与しているので、時間的にほぼ同時的である。第二は牛殺しの場面の縁辺部に配列された、付属場面<sup>(8)</sup>、絵解きの枠<sup>(9)</sup>、あるいは多場面パネル<sup>(10)</sup>である。これ等は四辺形、あるいは上部が丸くなった台形の枠の中に、牛殺しとは別の場面が描かれている。それ等は時として、特別の枠を持たず、縁辺部の余白に描かれることもある。第一のものに対して、これは時間的に異った諸場面を示していることは明らかで、後述するように、それは時間的順序を追って解釈される<sup>(11)</sup>。付属場面を伴う図像は、すべてのミトラス神殿に万遍なく見られるのではなく、オステイア（イタリア）、メリダ（スペイン）、ロンドンやハドリアヌスの城壁沿い（イギリス）などでは出土していない。それに対して、ライン川とドナウ川流域、イタリア北辺とスイス（ラエティア属州）では広く発見されている<sup>(12)</sup>ので、ウィルヤテュルカンはキュモンに従い、付属場面をラエティア・ライン・タイプとドナウ・タイプの二つのカテゴリーに分類している<sup>(13)</sup>。

### ミトラス教図像の付属場面

付属場面の読み取り方、すなわち順序には様々な例外があるとはいえ、一定の原則がある。ウィルが図示している例に従い<sup>(14)</sup>、ドウラ・エウロポスとオスターブルケンの場合を挙げよう。前者は牛を殺す神を表わす半円形の浮彫であり、付属場面はその上部の縁辺部をアーチ状に囲んでいる。場面は一三あり、その発端はアーチの中央、すなわち最高部にある場面で、光背をつけ、ヴェールを被ったサトゥルヌスの上半身が描かれている。そこから左下偶まで六場面が連続し、その次は右下偶の岩（又は雲）を射るミトラスの場面に引きつがれ、そこから合計六場面がアーチの最高部に向って上昇する。最後の場面は冒頭のサトゥルヌス神のそれと隣り合わせであり、そこにはミトラスとソルの饗宴の場面が表わされている<sup>(16)</sup>。他方、後者、すなわちオスターブルケンの浮彫はほぼ正方形をなし、中央の牛を殺す神に対し、左右と上方の縁辺部に、合計一七の付属場面が浮彫で描かれている。その冒頭は左下偶の花びら状の文様中の顔面（カオス）<sup>(17)</sup>であり、上方へと進む（六場面）。左上偶の不定形部分には、ソルが操る四頭立てのチャリオットや鳥の他、岩からのミトラスの誕生の場面が見られる。上部中央の欄には、ジュピターを中心とするオリュンポス山の神々の

集いが描かれ、その右、すなわち右上偶の不定形部分には、ルナが操る二頭立てのチャリオットなどの他に、牛をかつぐミトラス<sup>(18)</sup>が見える。その下の場面には岩を射るミトラスが描かれ、それを含めて合計七つの付属場面が右下偶の饗宴の場面にいたっている。

## 二 キュモンの解釈

キュモンはこれ等の場面を次のように解釈し、ミトラス教義の大筋を把握することができた。

それによると、世界の最初の時代を支配していたのは、クロノス（サトゥルヌス）であり、彼はイランのゼルヴァン思想に出てくる永遠時間の神（ゼルヴァン・クロノス）である。その後、ジュピターが現われると、クロノスは彼に支配権を攘り引退する。錫杖と雷を持ち物とするジュピターは、マズタ教ではアフラ・マズタに相当し、四本足の巨人（ギガンテス）を打ち亡ぼすジュピターの活動は、アーリマンの手先である悪霊たちに対するアフラ・マズダの戦いを意味している。キュモンによると、ジュピターと巨人族との戦いの神話自体オリエントに由来する（例えば、ティアマットの手下達に対するマルドゥクの戦い）ものであり、そのような起源を持つ

た図像がミトラス教と同時代の美術に現われている。<sup>(21)</sup> いずれにしても、付属場面にはイランやパピロニアの古い神統記が伝えられていて、その媒介をしたのは、アナトリアに移住したマゴスたちである。<sup>(22)</sup>

岩からのミトラスの誕生については、イランに適切な事例がないことを認めた上で、キュモンは神を生む岩としてシリアで崇められていた石偶やフリユギアのアグデイスティス神話を引き合いに出し、<sup>(23)</sup> アナトリアに来たマゴスがこうした原始的神話をミトラスの誕生を説明するために借用したと考えた。<sup>(24)</sup>

こうして生れたミトラスの次のエピソードは、岩を射て、泉を湧き出させるといふ奇蹟である。当時旱魃が世界を荒廃させようとしていたが、この奇蹟のおかげで救われた。この場面についても、キュモンはイランに原型がないことを認め、『出エジプト記』（一七、六）のモーセの奇蹟を類似例として挙げている。

次の一連の場面は、牛にかかわっている。<sup>(25)</sup> 聖なる牡牛はまず、三角屋根の家の中や舟の上にいる。やがて野を歩くこの豊饒の牛はミトラスの発見するところとなり、角を握ったり、背に飛び乗ったり、組み伏せたり、の冒険の後で、ミトラスは牛をかついで、<sup>(27)</sup> 天の洞窟に運び、そ

れを短剣によつて殺す<sup>(28)</sup>。これ等の場面については、キュモンは先例やそれを説明する思想的背景を見出すことはできなかつたようである。

最後の数場面は牛殺しが終わった後に起つたと見られる、ミトラスとソル（太陽神）との関係を描いている。キュモンはすでに、付属場面のうちで、この部分が最も分りにくいことを認めていた<sup>(29)</sup>。その点は、テュルカンも認めているし<sup>(30)</sup>、フェルマースレンも同様である<sup>(31)</sup>。いずれにせよ、まずミトラスは自分と同じような若者の姿をとるソルと対面する。キュモンは両神の間に何等かの緊張関係が存在したと推定しているが、結局両神は祭壇上で手をさしのべ合い、握手（デクシオシス）によつて盟約関係に入る。次に、ミトラスは馬に乗り、弓矢で獣を狩り立てる。牛殺し以後の場面で最も頻繁に描かれるのは、次のミトラスとソルの饗宴（晩餐）の場面である。彼等は殺した牛の皮をかけたテーブルに隣りあわせて坐り、食事をとる。神によるこの儀式は、神殿内において信者達によつて模倣され、繰り返された<sup>(32)</sup>。キュモンはここにミトラスの神話（一代記）と神殿内の儀式との接続点を見出した。彼はまたこれを最後の晩餐になぞらえている。付属場面すべての末尾は、四頭立ての馬車に乗つたミ

トラスとソルが昇天するシーンである。キュモンは『列王記』上（二、七以下）のエリヤの昇天やキリストの昇天を引き合いに出している。

キュモンはこれ等の付属場面のそれぞれについて、メソポタミア神話、アヴェスタやブندگانヒシユンなどのイラン系宗教思想、ビュプロスのフィロン、マニ教神話、ギリシア神話、ローマの皇帝崇拜、聖書などを引用し、最大級の博学ぶりを示しているが、全体としては可能な限り、イラン系宗教文学によつて説明しようとする傾向が既に明らかである。この傾向は後になると更に明確になった<sup>(33)</sup>。クロノス（ゼルヴァン・アカラナ）に始まる神々の世界は、ジュピターはアフラ・マズダ、ユノはスペンタ・アルマイテイ、ネプチューンはアパム・ナパトというように、イランの神々の世界を表わすものとされる。とりわけ、付属場面やその他のミトラス教図像には姿を現わさない悪の神アーリマンが、アフラ・マズダと並ぶクロノスの息子としてその存在が想定され、付属場面は善悪両勢力のせめぎ合いの動的な世界であるかのようである。やがて岩から生れるミトラスは、この両勢力の中間に位置づけられる。ミトラスが牛を殺して、その恵みが世界に流出した時も、それをアーリマンの手先の

悪霊たちが狙っている。ミトラスが岩を射て泉を湧き出させることによって克服した旱魃も、実はアーリマンの仕業であった。

キュモンによれば、このように付属場面はアフラ・マズダとアーリマンの争う善悪二元論的対立を描いている。しかも、この対立は原初にゼルヴァン・アカラナによって定められた宿命に従って展開する。要するに、キュモンの付属場面解釈は彼のミトラス教イラン起源説の中核をなしていると云うことができよう。

### 三 キュモン以後

キュモンのイラン起源説は一九二〇年代に完成したと見られるが、その後、イランのマズダ教とローマの密儀としてのミトラス教との間には質的な相違があるというノックの指摘があり、<sup>(35)</sup>第二次大戦以後ははつきり批判的な論潮が出るにいたった。<sup>(36)</sup>他方、付属場面を中心とするキュモン説は、ザクスルを経て、キャンベルに<sup>(37)</sup>いたった。また、キュモン説に対する批判というにとどまらず、積極的に異説を唱えた例としては、<sup>(38)</sup>ヴィカンデルがその代表的実例であるが、最近のユランシの<sup>(39)</sup>占星術的解釈もそれに含まれよう。これ等の諸説は極端に走ったものであ

り、他の研究者から認められていないが、<sup>(41)</sup>方法論的批判の方は相当な説得力を持ち、それは最近のいくつかの概説書に反映されている。ここでは、付属場面についての記述においても、キュモンのイラン的解釈は稀薄化している一方、時間的順序もキュモンより懷疑的、あるいはルースな形をとっている。

フェルマースレンはミトラスの岩からの誕生、ミトラスの牛の捕獲と殺害、岩を射るミトラス、狩をするミトラス、ミトラスとソル、クロノス(サトゥルヌス)とジュピター、ジュピターの巨人退治という順序で付属場面を述べ、<sup>(42)</sup>キュモンの与えた時間的順序には従っていない。シユヴェルトハイムもこれと大同小異の記述の仕方をして<sup>(43)</sup>いる。両者とも個々の場面の解釈ではキュモンに従う。メルケルバッハは<sup>(44)</sup>夢見るサトゥルヌスなど一部の場面について独自の解釈をするが、大多数の場面についてはキュモンを踏襲している。彼の学説の特色は、付属場面のそれぞれの意味を信者の七位階の儀礼と結びつけた点にある。テュルカン<sup>(45)</sup>はウイルに倣って、付属場面をラエティア・ライン・タイプとドナウ・タイプに分けて、両者を別個に扱うが、両タイプは共通の原型に基くとし、とりわけ前者についてキュモンと同一の解釈、同一の時

間的順序をとつて<sup>(46)</sup>いる。テュルカンは神統記という語は用いないが、その代りに付属場面は絵や彫刻で語られた聖史であり、ミトラスの牛殺しはゲスタ（業績録）の帰結であると述べて<sup>(47)</sup>いる。

以上のように見ると、キュモン以後の代表的概説書では、キュモンによる付属場面の読み取りについては基本的には彼の最初の説明が維持されたが、彼自身が次第に強めて行つたイランの二元論による色付けは排除されている、という点である。それには、イラン重視のキュモン説に対する方法論的批判が影響していると見られよう。<sup>(48)</sup>また、キュモンがゼルヴァン・アカラナ崇拜の宿命説を打ち出したために、神統記或は神のゲスタとしての本来の性格、即ち時間的順序の重要性はイランの二元論と共に忘れ去られる傾向があつた。この点はフェルマースレン、シュヴェルトハイム、メルケルバッハに現われているが、テュルカンでは正當に評価されていると云えよう。

#### 四 神統記の復活

キュモンが一九世紀末に付属場面の図像についてその読み取りを公刊した当時、知られていた本来の意味の神統記は、前八世紀のヘシオドスのものと後一世紀中葉か

ら二世紀前半<sup>(49)</sup>にかけてのビュプロスのフィロンのもの二つであつた。他の多くの神話にも神々の系図は描かれているが、父子神の対立抗争に基づく世代交代の物語、即ち天上王権神話はこの二つであり、キュモンが付属場面に見出したのはそれ等の神話のいくつかの場面であつた。

ヘシオドスの神統記によると、原初のカオスから生じたウラノス（天）とガイア（地）は一八人の子を持つたが、策に長けた大いなる末子クロノスが反逆し、ウラノスがガイアを抱いている時、大鎌でその陰部を切り取り、自らの王国を建設した（J. 154-210）。次に、クロノスとレアの六人の子の末子ゼウスがクレタ島におこり、父を退位させた（J. 453-500）。ゼウスはテイタネス（巨人族）等と一〇年間戦い、それを亡ぼし（J. 617-720）、オリュンポスの神々の王となつた。彼の出現はそれまでの無秩序の終末を意味し、それからは正義が行なわれるようになった（J. 881-929）<sup>(50)</sup>。

ビュプロスのフィロンの神統記は、サンクニアトンのフェニキア語の作品のギリシャ語訳とされるが、このサンクニアトンの年代は前二千年紀、前五〇〇年頃、ペルシア時代あるいはヘレニズム時代、ヘレニズム時代あるいはローマ時代などと様々に云われてはつきりしない。<sup>(52)</sup>



いずれにせよ、フィロンにはフェニキアの古い神統記が伝えられていると思われる。それによると、最初にカオスとガスが存在した (Frag. 10. 1) 次の代はウラノス (天) とゲー (地) であり、その子がクロノス (エル、エロス) とダゴンである (Frag. 15)。クロノスはウラノスに戦をしかけた (Frag. 18)。ゲー (ガイア) はデマルス (ハダッド) を生んだ (Frag. 19)。デマルスの子がメルカルトス (メルカルト) である。

この二つの神統記は当初からキュモンに知られていたが、上述のように、彼はこれ等をも特に付属場面との比較材料と考えたのではなく、彼にとつてはその点ではイランの宗教文学が第一であった。このような傾向は、一九一五年にヒッタイト帝国の首都ボアズキョイで発見された楔形文字の粘土板文書群から、フリ語の神統記 (クマルビ神話) が発見され、一九三六年にフォラーによってキュモン自身の記念論集の中でヘシオドスとの類似性が指摘<sup>(56)</sup>されても変ることがなかった。

前三世紀のものとされるこのクマルビ神話によると、原初にはカオスは存在せず、神アラルが王者として支配していた。配下の神々の筆頭であったアヌはアラルに反逆し、打ち破った。アヌに対して、今度はその臣下のク

マルビが反乱し、結局アヌは天に昇り、身を隠した。アヌの陰部に咬みついて精子を得たクマルビは、やがて天候神を生んだ。天候神が支配者となってから、クマルビと岩の性交から生じた巨人ウリクンミが暴れ出したが、最後にはこの怪物は打倒され、天候神の王位は不動のものとなった。

この神統記には女神 (ガイアやレア) が欠けているが、ヘシオドスと比較すれば、アヌはウラノスに、クマルビはクロノスに、天候神はゼウスに対応し、全体として第三代において秩序が確立する天上王権神話をなしていることは明らかである。他方、ここにはアヌが現われるにもかかわらず、ギューターボックが指摘する通り、メソポタミアのエヌマ・エリッシュやシユメール神話に対する類似性は乏しいと云わなくてはならない。

他方、ビュプロスのフィロンの伝えるフェニキアの神統記とクマルビ神話の対応も四代にわたって存在している。即ち、エリウンはアラルに、ウラノスはアヌに、クロノス (エル) はクマルビに、デマルス (ハダッド) は天候神 (テシユブ) に対応している。両者の歴史的結びつきの証拠は、ボアズキョイ文書とほぼ同時代のウガリット文書の世界に求められよう。<sup>(58)</sup> こうして、ギュー

ターボックはフリ人の神統記がフェニキアに入り、それが更にヘシオドスにいたったものとして(59)いる。カークもまた、クマルビ神話とギリシアの神統記の比較を行い、前二千年紀にアナトリアからフェニキアを経て、ギリシアへの神話の影響を認めている(60)。

他方、クマルビ神話には岩からの神(怪物)の誕生という要素が含まれているが、それはビュプロスのフィロンにも、ヘシオドスにも欠けている。この要素は原始的な岩石崇拜に発するもので、シリアからコーカサス地方まで、フリ人の発生地を含む地域に広く分布していたが、ウリクンミの歌はそのような背景を持つものである(61)。岩から生まれるミトラスの神話も同根であると思われる。これに対し、パウサニアスからアルノビウスまでのギリシア・ローマ、キリスト教の著述家たちが伝えるアグデイスティス伝説がある。それによると、フリユギアのペッシヌス山の近くにアグドウスと呼ばれる巨岩があったが、これとジュピターの性交によつて、アグデイスティスという両性具有の怪物が生れた(62)。この伝説、ウリクンミの歌、岩から生れるミトラスの三者の関係は現在までのところ不明であるが、少くともフリ人の神話とミトラス教では、神統記と神の岩からの誕生の物語が結び

ついている点は興味深い。

このように、キュモンがミトラス教付属場面の神話の類似例の一つとして挙げたギリシアとフェニキアの神統記は、クマルビ神話の発見と研究によつて、そのオリエントにおける起源と流布の道筋が明らかになった。その結果、キュモンが行なったような、イランの宗教文学を中心とした解釈に対する説得力は増すことがなく、むしろ、フリ人の神話がフェニキアに伝えられ、それがヘレニズム時代まで残存し、ギリシアの神統記と再びまじりあつたものこそ、ミトラス教神話、とりわけその神統記の形成に影響を及ぼした可能性が強まったと云うことができる(63)。フェニキアの英雄神メルカルトの一代記と神統記とが結びついて、ミトラス教の教義形成に寄与したのである。

## 五 神統記と神の一代記

とは云え、ミトラス教付属場面の神統記には、クマルビ神話からヘシオドスまでの諸先例と比較した場合、独自の特色が存在している。付属場面では、サトゥルヌスとジュピターという二代の支配者が現われ、巨人殺しというギリシアの神統記も描かれているが、サトゥルヌス

(フリ人のクマルビ、ビュブロスのフィロンのクロノス・エル)に先行する一世代又は二世代(ギリシアのウラノス、フリ人のアラルとアヌ、フィロンのエリウンとウラノス)は欠けている。ミトラス教の神統記は、これ等の先行する諸神統記を翻案し、簡略化したものということができよう。あるいは、パピルスの巻物に記されていたとされる原図(上述)には、三世代又は四世代の神統記が描かれていたが、神殿内に掲げられる際は省略されたのかも知れない。

ミトラス教神統記の最もユニークな点は、ジュピターの巨人殺しの場面の次に、神の岩からの誕生の場面が来ることである。これをもってミトラス神の世代が開始されるが、それは他の神統記のどの神の支配時代にも見られない神の事蹟を内容として<sup>(64)</sup>いる。それはミトラス神の一代記と呼ぶべきもので、同時代宗教であるキリスト教の教祖伝に相当する部分である。付属場面の制作者が、神の岩からの誕生以後の諸場面をも神統記の一環、あるいは連続とみなしていたことは明らかである。岩からの誕生、牛殺し、ミトラスとソルの昇天等の場面には、引退した横たわるサトゥルヌスの姿が見られるし、<sup>(66)</sup>彼はミトラスに短剣や鎌を渡そうとして<sup>(67)</sup>いる。

しかし、岩からの誕生以後の諸場面では従来の神統記とは異質の物語が描かれ、しかもそれがミトラス教教義において中心的な位置にあったことは、岩から生れるミトラスや牛を殺すミトラスが、付属場面とは別に、独立した図像として制作され、神殿内に安置されていたことから伺うことができる。

ミトラスが岩から生れた時、その手の中、あるいはその周囲には、岩を射て泉を湧き出させたり、野生の猪や鹿を狩り立てるための弓矢、そして牛を殺すための短剣が描かれているが、これはミトラスが生れた瞬間から使命を帯びていたことを示している。ミトラスの諸行為は、一種の功業であり、その目的は世界に豊饒をもたらすことであり、ミトラスとソルの事蹟は、その聖なる事業の確認と祝賀に関係があるであろう。

このような物語の中で特に留意すべきことは、ミトラスが若々しい青年神として描かれ、彼の活動は宇宙的規模による若神の功業に他ならなかった、という点である。フェルマースレン<sup>(68)</sup>はそれを英雄神ヘラクレスの功業と対比しているし、ウイルは同時代のヘラクレスの図像にも物語の各場面のために枠を使ったものがあることを指摘している。<sup>(69)</sup>また、果実を摘み取るミトラスは、ヘスペリ

デスのりんごとヘラクレスの物語を想起させる。<sup>(70)</sup> ミトラス教の図像製作者は、上述の通り、<sup>(71)</sup> フェニキアで先行する神統記の影響下にあつたと思われるが、ミトラスの一代記についても、その地でフェニキアのヘラクレス、即ちメルカルトの功業物語の影響を受けたであろう。<sup>(72)</sup>

このように、付属場面の伝える物語は、世界に豊饒をもたらずことで終る聖史<sup>(73)</sup>を描く図像であり、いわば神統記に組み込まれた英雄神の功業がミトラス教の教義の中核をなしていた。

最後に、付属場面という表現形式自体について付け加えておこう。宗教的、文学的テーマをこのような物語形式で表現する例は、古代オリエントにも、同時代ローマ帝国にもみられるが、<sup>(74)</sup> ミトラス教付属場面の独自性はそれを時間的に展開する教義、即ち聖史を表現するために使ったことである。この表現形式の問題はキュモン以後、トウータン、ザクスル、キャンベルなどによって扱われてきたが、<sup>(75)</sup> 形式と場面の内容との区別が明らかでない。これに対して、ウィルは彼が設定したラエティア・ライン・タイプとドナウ・タイプの起源の土地として、ヘレニズム時代オリエント、とりわけアナトリアとシリアを考えているようである。<sup>(76)</sup> これはミトラス教神統記とその

一環としての一代記のフェニキア起源説とある程度符合している。

### 結び

以上の考察の帰結は次の三点である。(一) ミトラス教図像の付属場面はキュモンが想定していた以上にはつきりと神統記的である。(二) ミトラス一代記は同じように付属場面で表わされていることから分る通り、神統記の連続体として考えられていた。(三) ミトラス教神統記及びその表現形式の起源の土地はヘレニズム時代フェニキアの可能性がある。

更につけ加えるならば、神統記の各世代の無秩序、斗争、反乱は、カークの指摘するように、<sup>(77)</sup> 性的活動の過剰と不自然な多産がモチーフになっているが、ミトラス教神統記ではそれがいわば浄化され、豊饒の表現はミトラスによる牛殺しの場面に集中している。

### 註

(一) 一九三四年に発見されたドゥラの神殿の壁のギリシア語グラフィティ「火のような氣息はマゴスたちにとって聖者たちの沐浴(である)。」(M. J. Vermaseren, *Corpus Inscriptionum et Monumentorum Religionis Mithriacae* (CIMRM) I.

- The Hague, 1956, 68; cf. 69) 他方、一九五二年以後発掘されたサンタ・プリスカ教会地下の神殿の壁のラテン語碑文「汝は永遠の流血によって我々をも救った。」(M. J. Vermaseren and C. C. van Essen, *The Excavations in the Mithraeum of the Church of Santa Prisca in Rome, Leiden*, 1965, p. 217, Line 14) 「私はミトラスの偉大な力が示されるよう供物を捧げる」(ibid., p. 221, Line 15) 「彼がその意志に従い、その黄金の肩に運ばる若い牡牛」(ibid., p. 200, Line 7) 「双生児にネクター酒を飲ませる岩盤の泉」(ibid., p. 193, Line 4) 等。
- (2) F. Cumont, *Textes et monuments figures relatifs aux mysteres de Mithra*, I-II, Bruxelles, 1896-8.
- (3) 拙稿、『ミトラス教のシンボルと神話に見られる女性的要素の痕跡』『歴史学研究』一九九一年、四、一三及び一五頁参照。
- (4) 一九七一年に開催されたマンチェスターの第一回国際ミトラス学会の紀要は、J. R. Hinnells ed., *Mithraic Studies, Proceedings of the First International Congress of Mithraic Studies* (1971), 2 Vols., Manchester, 1975. 一九七五に開催された第二回国際ミトラス学会の紀要は、Études Mithriaques, Actes du 2<sup>e</sup> Congrès International, Téhéran, du 1<sup>er</sup> au 8<sup>me</sup> septembre 1975, *Acta Iranica* 17, 1978. 一九七八年に開催されたローマとオステイアのミトラス教シンポジウムの紀要は、U. Bianchi ed., *Mysteria Mithrae, Atti del Seminario Internazionale su 'La specificità storico-religiosa dei Misteri di Mithra, con particolare riferimento alle fonti documentarie di Roma e Ostia'*, Roma et Ostia 28-31 Marzo 1978, Leiden, 1979. 一九七〇年代以後においては、ミトラス教の国際学会は開かれていない。これ等の紀要にはミトラス教の教義、例えば、本稿で扱う付属場面の解釈について何等新しい研究が発表されていない。もともと、付属場面はヒエロス・ロゴスの形をとった神話であるというブルケルトの指摘は注目される。W. Burkert, *Ancient Mystery Cults*, Cambridge (MA), 1987, pp. 73f.
- (5) 注(1)参照。この碑文は神殿壁面上下層のうち下層(一九〇一—二〇〇年)に属する。cf. Vermaseren and van Essen, *op. cit.*, p. 177.
- (6) 注(2)参照。この二巻本は第二巻(資料篇)が一九九六年に刊行され、第一巻(資料研究と結論)は一八九八年に出た。
- (7) *Die Mysterien des Mithra*, Leipzig, 1923.
- (8) Tableaux accessoires: Cumont, *Textes et monuments*, *op. cit.*, I, Chapitre 5, X.
- (9) Cadre historique: E. Will, *Le relief Culturel gréco-romain, contribution à l'histoire de l'art de l'Empire Romain*, Paris, 1955, p. 33.
- (10) Panneaux à scènes multiples: R. A. Turcan, *Mithra et le mithraïsme*, Paris, 1981, p. 45.
- (11) 但し、オーダーが確立しているとは云い難く、時間的順序が不明の場合もある。cf. Turcan, *op. cit.*, p. 48.
- (12) トリール、オスターブルケン、ディーブルク、ノイエンハイム、ベージビハイム、ケーニヒスホーフエン、サル

ブル、マウルス、ヴィルヌム等。

- (13) Will, *op. cit.*, pp. 357-364. テュルカンはこの点でウィルに従っている。 Cf. Turcan, *op. cit.*, pp. 45-55. 但し、地域的には、これ等両地方に限られるものではなく、付属場面はローマ市のパラッツォ・バルベリーニ (CIMRM I, 390: fig. 112) やメンポタミアのドゥラ・エウロポス (CIMRM I, 40, 1-12: figs. 16-21) の壁画にも見られる。このような図像の分布は、教義の偏りを意味するものではなく、壁画、浮彫による付属場面のない神殿においても、巻物や言葉によって同じ教義が行なわれていたと思われる。例えば、付属場面の原図となったパピルスの巻物などが流布していたであろう。 Cf. Will, *op. cit.*, pp. 412-415.

- (14) *Ibid.*, p. 375: fig. 71.
- (15) CIMRM I, 34: fig. 13. ドゥラ・エウロポスのミトラス教については、拙稿「ドゥラ・エウロポスのミトラス神殿と初期ミトラス教」一三『史学』四四二、四四一四、四五三、一九七一一三(『ミトラス教研究』リットン一九九三、一五一一二五頁)。

- (16) CIMRM II, 1292: figs. 340f.

- (17) カオスは後述するミトラス教神統記の冒頭に來るものと考えられ、ヘシオドスの神統記 (I, 116 以下) にもビュブロスのフィロン (Frag. 10. 1) にも世界の始源に現われるが、ミトラス教資料ではオスターブルケンはこの例のみであり、その本当の意味は分らない。 Cf. E. Schwertheim, *Mithras, Antike Welt, Zeitschrift für Archäologie und Kulturgeschichte* 10, 1979, p. 33; p. 48: fig. 63. ハラドはカオス

はミトラス誕生の必然性を強調しているとされる。

- (18) 後述するミトラス一代記中の一事件。 Cf. CIMRM II, 1495; 1497; 1811; 1900; 2205; 1722; 1737: transitus. (牛をかついだ神の通過。神は後肢を両肩にかついで、天の洞窟に運ぶ。)

- (19) 付属場面からは、ヘシオドスの神統記 (I, 453-500) に述べられているようなクロノスとレアからのゼウス誕生の物語(ケレーニイ、植田兼義訳『ギリシア神話、神々の時代』中公文庫、一九八〇、八一-一六頁参照)も、クロノスとゼウスの権力争い(ヘシオドスの神統記 I, 617-720. ケレーニイ、上掲書、二二-二三頁参照)も読み取れない。また、神統記の中で活躍するガイア、レア等の女神の役割は付属場面では不明である。但し、ミトラス教の中で女神たちが何れも役割を演じなかつたとは云うことはできない。 Cf. H. Ogawa, *Mithras and the Goddesses, Essays in honour of Prof. Dr. Tsugio Mikami on his 77th Birthday*, Heibon-sha, Tokyo, 1985, pp. 330-346. 『ミトラス教研究』(上掲) 二七五-二八九頁参照。

- (20) 付属場面において描かれるギガンテスは「煌めく青銅の鎧をつけ、長槍を手ばさんだ」(ヘシオドス、広川洋一訳『神統記』) という姿ではなく、ギリシア美術で描かれた姿(野獣の毛皮をまとい、腰から下は蛇身)に近い(アポロドロス I, 6. 1-3 参照)。

- (21) Cumont, *Textes et monuments, op. cit.*, I, pp. 157f.

- (22) *Ibid.*, p. 159. キュモンはハラド、クロネウス (I, 132: Magos; theogonien) を引用している。

- (23) 北アラビア、シリア・パレスティナの諸聖地の原始的石  
偶崇拜で、ヘレニズム・ローマ時代まで存続していた事例  
については、拙稿、古代末シリア宗教史研究(一)『史学』  
三七二、一九六四、九八頁以下。同(二)『史学』三七  
四、一九六五、六五頁以下。同(三)『史学』三九一、一  
九六六、九四一九六頁参照。他方、アグデイスティス伝説  
については、後述九三頁参照。
- (24) Cumont, *Textes et monuments*, *op. cit.*, I, pp. 159-161.
- (25) *Ibid.*, pp. 166-172.
- (26) 三角(切妻形)尾根の神聖な性格については、H. Oga-  
wa, *A Gable Roofed Grave at Tel Zeror*, *Orient* 7, 1972, pp.  
25-48 参照。
- (27) 注(18)参照。
- (28) 牛殺しについては、Cumont, *Textes et monuments*, *op. cit.*,  
I, chapitre 5, XII.
- (29) *Ibid.*, p. 172.
- (30) Turcan, *op. cit.*, pp. 51f.
- (31) フェルマースレン、小川訳『ミトラス教』山本書店、一  
九九三、一〇七頁。Cf. Schwertheim, *op. cit.*, p. 42.
- (32) ポスニアのコナイカの浮彫。前掲書、一一五頁、図三七。  
『ミトラス教研究』(上掲書)、図版(=CIMRM II, fig. 491)。
- (33) Cumont, *Die Mysterien*, *op. cit.*, pp. 96-128. キトカンゼル  
ヤでも神統記のミトラスはを使ひたる(p. 99)。
- (34) 上出八六頁参照。
- (35) A. D. Nock, *The Genius of Mithraism*, *Journal of Roman  
Studies* XXVII, 1937, pp. 108-113. 『ミトラス教研究』(上  
掲)、三〇頁他索引のノックの項参照。
- (36) 上述(注4参照)のマンチェスターの第一回国際ミトラ  
ス学会では、ヒネルズとゴードンが方法的な批判論文を  
提出した。J. R. Hinnells, *Reflections on the Bull-Slaying  
Scene*, *Mithraic Studies*, *op. cit.*, II, pp. 290-312; R. L. Gor-  
don, *Franz Cumont and the Doctrines of Mithraism*, *Mithraic  
Studies*, *op. cit.*, I, pp. 215-248. 最近の批判的記述としては、  
D. Ulansey, *The Origins of the Mithraic Mysteries*, Oxford,  
1989, Chapt. 1 (pp. 3-14) .
- (37) F. Saxl, *Mithras*, *Typengeschichtliche Untersuchungen*, Berlin,  
1931.
- (38) L. A. Campbell, *Mithraic Iconography and Ideology*, Leiden,  
1968. 書評は『オリエント』二三、一九七〇、一七八—  
八二頁。
- (39) S. Wikander, *Études sur les mystères de Mithra* I, Lund,  
1951.
- (40) D. Ulansey, *op. cit.*, Chapt. 2 以下。
- (41) キュモン説に代る新しい説明は、たちまち新たな、より  
大きな難題を生ずるのが常である。フェルマースレン『ミ  
トラス教』(上掲)、七九頁。
- (42) 前出書、八七—一一四頁。
- (43) Schwertheim, *op. cit.*, pp. 30-46.
- (44) R. Merkelbach, *Mithras*, Königsstein, 1984, pp. 86-133.
- (45) Turcan, *op. cit.*, pp. 45-55.
- (46) 即ち、テウルカン(*ibid.*, p. 51) はカノンのな場面とし  
て、横たわるサトゥルヌス、サトゥルヌスによるジュピ

ターへの雷の授与、ジュピターの巨人退治、ミトラスの岩からの誕生、ミトラスの果実収穫、岩を射るミトラス、ミトラスによる牛の追跡と捕獲、ミトラスの牛運び（トランシトウス）、ミトラスとソルの物語などを挙げている。

(47) *Ibid.*, p. 38. 彼はまた付属場面は牛殺しにいたる世界史の各段階であり、時の始源からの神代史であるともいっている (*ibid.*, p. 46)。

(48) 上出八九頁参照。

(49) Philo of Byblos, *The Phoenician History, Introduction, Critical Text, Translation, Notes* by H. W. Attridge and R. A. Odem, Jr., Washington, 1981, p. 17 (Testimonia 1).

(50) ケレーニイ、上掲書、八一―三三頁参照。

(51) Philo of Byblos, *op. cit.*, p. 19 (Testimonia 5).

(52) *Ibid.*, pp. 6; 9.

(53) Cf. Frag. 44; *ibid.*, p. 86, n. 85.

(54) Cf. Frag. 31; *ibid.*, p. 88, n. 94; p. 91, n. 126.

(55) *Ibid.*, p. 90, n. 118 英雄神メルカルトについては、拙稿「メルカルトの神性について『ユダヤ・イスラエル研究』一、一九九〇、八一―六頁。メルカルト神話とミトラス教々義の關係については、『ミトラス教研究』(上掲)、一三〇―一三三頁。拙稿、古代オリエントのアジール『聖なる空間』リトン、一九九三、一三七―一三八頁参照。後述九五頁参照。

(56) E. Forrer, *Eine Geschichte des Götterkönigtums, Melanges Franz Cumont*, Bruxelles, 1936, pp. 687-713. Cf. H. G. Güterbock, *Kumarbi, Mythen von Churritischen Kronos aus den*

ミトラス教図像の付属場面

*Heitnischen Fragmenten zusammengestellt, übersetzt und erklärt*, Zürich, 1946, p. 100. キュモンは一九四七年に死去したが、クマルビ神話を「総合的に集成し、訳出を試みた」のは、右のキュエーターボックの著作が最初であった。轟俊二郎『古代オリエント集』筑摩世界文学大系一、一九七三、三五〇頁参照。英訳は J. B. Pritchard ed., *Ancient Near Eastern Texts Relating to the Old Testament*, Princeton, 1966, pp. 120-125.

(57) Güterbock, *op. cit.*, pp. 105-110.

(58) *Ibid.*, pp. 111f. Cf. A. S. Kapelrud, *Baal in the Ras Shamra Texts*, Copenhagen, 1952, pp. 88f.

(59) *Ibid.*, p. 120. カオスだけはフリ人から来ず、エジプトからエトヒキトキリニアに伝来された。Cf. *ibid.*, p. 114.

(60) G. S. Kirk, *Myth, its Meaning and Functions in Ancient and Other Cultures*, Cambridge, 1973, pp. 214-217; 219f.

(61) 上注(23)参照。

(62) M. J. Vermaseren, *The Legend of Attis in Greek and Roman Art*, Leiden, 1966, pp. 3-5; cf. Britt-Mari Näsström, *O Mother of the Gods and Men, Some Aspects of the Religious Thoughts in Emperor Julian's Discourse on the Mother of the Gods*, Lund, 1990, pp. 26f. フェルマースレン、小川訳『キュベレとアッティス——その神話と祭儀』新地書房、一四二―一四六頁。

(63) 注(55)参照。

(64) 岩からの誕生自体、ミトラスのそれとウリクニミのそれでは意味が異なっている。前者は支配神の誕生であるのに対し



し、後者は支配神の敵の誕生である。

- (65) 但し、ウリクンミの歌では、ウリクンミが岩と性交し、アグデイスティス伝説では、ジュピターが岩と性交した(上述六三頁)が、ミトラスを生み出した岩がジュピターとそのような関係にあったかどうかは分らない。

porini und W. Haase, II, 17, 4, 1948, pp. 2081f. しかし、これ等の解釈は付属場面の意味についてはほとんど貢献していないし、ブルケルト (*op. cit.*, p. 84) はそういう解釈自体に懐疑的である。

- (66) フェルマースレン『ミトラス教』(上掲)、八九—九一頁。  
 (67) 同書、一一〇頁以下。  
 (68) 同書、一一〇—一一一頁。  
 (69) Will, *op. cit.*, p. 432, fig. 78; pp. 435f.  
 (70) Schwertheim, *op. cit.*, p. 35.  
 (71) 上述九三頁。  
 (72) 注(55)の文献参照。  
 (74) Cf. Turcan, *op. cit.*, p. 55.  
 (75) 上述九〇頁。トゥータンはキュモンの影響を受けながら、ミトラスの岩からの誕生以後の諸場面についてより明確化した。J. Toutain, La légende de Mithra, étude surtout dans les bas-reliefs mithriaques, *Revue de l'histoire des religions* XLV, 1902, pp. 141-157.  
 (76) Will, *op. cit.*, pp. 412-415.  
 (77) Kirk, *op. cit.*, p. 218.

[付記] 上述(九〇頁)の通り、ミトラスの牛殺しの場面の占星術的解釈が近年いたって、ユランシ(注40参照)、ベック等によりついでに述べられた。Cf. R. Beck, Mithraism since Franz Cumont, *Aufstieg und Niedergang des Römischen Welt, Geschichte und Kultur Roms im Spiegel des neueren Forschung*, ed. H. Tem-